

人権コラム 8月号

【ヒロシマは歳をとらない】

池上 英明（大阪教育大学）

8月に掲載されるこのコラム。やはりヒロシマについて書かせてください。

◆G7広島ビジョンを報ずる番組で一人のコメンテーターが怒りの涙に震えてコメントをされていた姿が忘れられません。「今回の広島開催のサミット、被爆者のみなさん本当に期待していたんです。被爆の実相を見れば、何か血の通った言葉が最終成果文書に入るんじゃないかと。ふたを開けたら核兵器廃絶という言葉もない、核兵器禁止条約という言葉もない、被害者援助の話もない。これまでのものと何も変わらないんですよ。中国、ロシアを責めるのもいいですけど、G7諸国は核軍縮にもきちんと取り組んでいるのかと被爆者の方は怒っているんですね。」と涙ぐみながら話されていました。“このまま話せなくなるのでは”と私が思った瞬間、その方は、きっと顔を上げ「被爆者の方は『でも、諦めない』とおっしゃっていた。だから私も諦めない」と締めくくられました。

◆サミット終了後しばらくして、ある新聞のコラムに目が留まりました。「戦争を論じるように原爆は論じられない。原爆と戦争を同列に語るな。サミットは広島で開かれるべきだったのか。へそ曲がりと言われようと、ウクライナへのF16戦闘機供与が最大の『成果』で、原爆慰霊碑に献花する光景の後、戦闘機発進の映像を繰り返し見せられれば、もの言わぬヒロシマに本望かと尋ねたくなる」（土記.広島サミット再論.毎日新聞朝刊.2023.5.27）

◆これらの報道に接し、私は改めて被爆者方々の言葉を思い出しました。「私のヒロシマの話には終わりがありません。なぜかというヒロシマには歳はないから。あの日のまま。何十年たってもあの日のまま。(略)世界にあのおそろしい人殺しの道具がなくなるまでは、ヒロシマは歳をとらない。とらせたら困るんです。」(人権教育読本にんげん6年「ヒロシマには歳はないんよ」佐伯敏子から引用)。また、李鐘根（イジョングン）さんは、亡くなる数カ月前まで証言会に臨み若者に語っておられました。「皆さんに過去への責任はないが、未来に対する責任はある。二度と戦争を起こすような人になってはいけない」（在日被爆 二重の差別.毎日新聞朝刊.2023.6.4）

◆こうした中、若い世代の一人である田中美穂さん（カクワカ広島－核政策を知りたい広島若者有権者の会－共同代表）は「核兵器が使われるリスクが高まっている中だからこそ、広島から核兵器と戦争に反対を訴え行動しなければならない。私たちの活動はまだ大きなことを生み出したわけではなく、悔しい思いはある。ただ、何も行動しなければ「おかしい」と思うシステムに加担し、その犠牲になっている人たちをさらに踏みつけることになってしまう。」（論点.核廃絶へ道筋示されず.毎日新聞朝刊2023.6.2）

－「いかなる国の核兵器も許さないという声を今こそあげなければ」私は決意を新たにしました。